

蓬門久閉謝來車 畏暑尤便小閣虛 青引嫩苔留鳥篆 綠垂殘葉帶虫書 寒泉出井功何有
白羽邀涼計已疎 忍待西風一蕭瑟 碧鱸斫鱠意何如

【読み】

蓬門（ほうもん）久しく閉ざして 來車を謝（しゃ）し 暑を畏れるは 尤（も） つとも 小閣の虚しきを使（たよ）りとす 青は嫩苔（どんたい）を引いて 鳥篆（ちようてん）を留め 綠は殘葉を垂（た）れて 虫書（ちゅうしよ）を帶（お）ぶ 寒泉 井（い）より出（い）でて 功（こう）何ぞ有らん 白羽もて涼しさを邀（むか）えんとする計すでに疎（そ）なり 忍んで西風の一たび 蕭瑟（しょうしつ）たるを待たん 碧鱸（へきろ）鱠（かい）に斫（き）りて意（い）いかん

【意味】

粗末な我が家の門は長く閉ざされ、訪れる人の車も断っている。ひどい暑さを避けるには、人気のない小さな部屋がいちばんだ。青々とした若い苔の上には、鳥の足跡のような模様が残り、緑の葉が垂れ下がり、虫のかじった跡がまるで文字のように見える。冷たい泉が井戸から湧き出しても、大して涼しきの役には立たず、白い羽の扇で涼もうとしても、それはとくに役に立たない。せめて秋風がひと吹きして、あたりがひんやりとするのをじっと待とう。そのときこそ、碧色の鱸をおろして刺身にして味わいたいものだ。

*蓬門：質素な庶民の家 *嫩苔：若い苔 *鳥篆：鳥の足跡のような模様（苔の上を歩いた跡） *虫書：虫が葉を食った跡がまるで文字のように見えること。 *疎：あてにならない。役に立たない。 *邀涼：涼を求める *晁応之：作者の友人 *大暑：二十四節気の一つで、一年で最も暑い時期 *書事：思いを記す *和：唱和する。一方が作った詩歌に応じて、他方が詩歌を作ること。

【出典】和晁応之大暑書事（張耒・北宋）晁応之の“大暑に事を書す”に和す

※作者は、酷暑の中で俗世から離れ、静かな住まいで夏をしのいでいる自分の暮らしぶりを描いています。そして、暑さに耐えながら、涼しい秋風の季節が訪れ、故郷のスズキの刺身（碧鱸斫）を味わえる日を心待ちにしている、そんな心情を詠んでいます。